



TITLE:

物性研究創刊

AUTHOR(S):

---

CITATION:

物性研究創刊. 物性研究 2012, 97(6): 1203-1204

ISSUE DATE:

2012-03-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/172068>

RIGHT:

## “物性研究” 創刊 \*

名大・理 長岡 洋介

この原稿を書くため、図書室に入って書棚に並んだ「物性論研究」と「物性研究」をながめてみた。白い表紙の「物性論研究」ははじめの東大編集の分はそろっていないが、阪大編集の分は1949年から1957年3月発行の106号まで約9年つづいている。このあと京大編集による黄色い表紙の「物性論研究第2集」は5年ほどつづく。そして青表紙の「物性研究」はもう10年になるわけである。まだ白表紙には及ばないが、黄表紙はとうに越してしまったことになる。創刊当時の事情を思いおこしてみると、よくつづいたものだというのが私のいつわらざる感想である。実のところ、私はもっと早くつぶれてしまうだろうと予測していた。

「物性研究」の創刊に当たったのは、当時基研のスタッフであった碓井・森・長岡の3人であった。「物性論研究」が廃刊に至った事情は、要するに論文の投稿が極端に減少し、継続が不可能になってしまったということであったと思う。しかしそこに相当額のお金(30万?)が残ってしまったのである。いわば黒字倒産である。そこでこのお金をどうするかが問題になり、編集部から会員に意見が求められた。その話がコロキウムのとだっただかに編集の責任者であった富田先生から出されたときであったと思う。いっその財産を受け継いで新しく、また雑誌を出してはどうかという意見が出たのである。強く主張されたのは松原先生であったと記憶する。その意見にリードされて、基研のスタッフが編集を引き受けるという風に話が進んだのである。

もう一度新しく始めるといっても、「物性論研究」が廃刊せざるをえなかった事情はなくなっていない。そういうときにまた新しく雑誌を出す目的はなにか、新しい雑誌はどういうものでなければならないか。出すことに私も賛成ではあった。しかし、お金の始末に困ってまず雑誌を出すことが決り、それから雑誌を出す意義を考えるというのは無責任な話ではあるが、私にとってはそういうところがなかったでもない。

雑誌を新しく出すとなると、しなければならないことは少なくない。幸い、当時プログレスの編集室にいた須田君が事務を手伝ってくれることになった。三種郵便の認可をとる。そうするには廃刊した雑誌と同じ誌名ではまずいというのが、「物性論研究」から「物性研究」への改名の第一の理由であった。物性論という名前からくる理論中心の雑誌というイメージを実験も含む物性物理の雑誌に変えようという哲学は、ここでもあとからついた。表紙を決める。イメージ・チェンジをはかって色も暖色から冷色へ。体裁は「素粒子論研究」など他グループの雑誌とそろえた。

---

\*本稿は、著者の希望により、「物性研究」10周年記念特集(本誌20巻3号(1973年6月号), pp. 80-83)を再録した原稿である。著者の所属は掲載当時のものである。

もちろん、一番大切なのは中味である。どういう雑誌を出そうとしているかをみんなに知ってもらうには、実物を見てもらうのが一番であるということで、とにかく第1号をつくることになった。京都の人たちの意見をおききし、実際に投稿をお願いしてご協力をいただいた。とくに“イイダシベア”の松原先生には講義ノートを書いていただいた。こうしてできたのが創刊号である。その編集後記に雑誌を出す意図が編集部として碓井・森・長岡の連名でまとめられている。この第1号はあとで述べるような理由で散逸してしまい、持っておられない方もあると思うので、その一部をここに引用しておきたい。

“「物性論研究」が終刊されてただちに「物性研究」を創刊するについては、その刊行の趣旨なり哲学なりを述べる必要がありそうに思います。現在このタイプの雑誌は存在意義を失った、「物性論研究」終刊という事実がその何よりの証拠だという説があります。たしかに「物性論研究」創刊の当時と比べるならば、研究者の数や構成や流動性は大きく変わっており、このようなサーキュラーの必要性は減っているかも知れません。しかし、一方では共同利用研究所で主催される研究会は相変わらず隆盛であり、その意義はますます高く評価されています。そうであるならば、限られた場所で、限られた人員で行われる研究会の内容を報道し、それを全国のすべての研究者の共有物とすること、さらに進んでは研究会そのものを印刷によって拡大し、すべての研究者が討論に参加できるようにすることも大切なことであると思われます。言うなれば、共同利用研究所ならぬ「共同利用雑誌」として、月刊のサーキュラーの刊行を行う決心をしたのです。”

編集後記では、このあと論文は完成したものというより研究途上のものの討論の場としたいこと、そのほか研究会報告も、講義ノートの掲載、研究体制等の問題についての討論、海外だより、プレプリント案内等の研究情報の交換などを、この雑誌の内容としていきたいと述べている。

第1号は相当沢山（800部？）つくった。これを宣伝用として、気にいったら購読申込みをしてほしいとの手紙をそえて、これまで「物性論研究」の会員だった方々、その他気のついた研究者のもとに送った。どれだけ支持が得られるかあまり自信はなかった。私はだめなら資金がきれたところでやめればよいという気であった。幸い、ある程度の購読申込みがあり、一応「物性研究」は出版がつづくことになったのである。

以上が創刊当時の事情である。私の記憶によったので細かい点であやまりもあるかも知れないが、筋書きはまあこんなものであった。私は約半年編集の仕事をやり、そのあと外国出張に出かけ、帰ってきてすぐ基研をはなれたので、一人の会員・投稿者の立場に変わってしまった。それから10年の間に、最初私たちの意図したもののある部分は生き、ある部分は変質したと思う。変質したのは、私たちの考えが非現実的であったということであろうか。しかし、こうして私の予測に反して10年つづいたというのは、このような形になった雑誌に、いま理想的な状態にあるとは言えないにしても、それなりの存在意義があることを示しているとみてよいのではなかろうか。もちろん、私以後の歴代の編集者の苦心と努力がそれを支える力であったことも事実である。